

ことばへのこだわり



海老原 充

Ebihara Mitsuru

(首都大学東京 理事・副学長)

私も Isotope News 誌を手にする 1 人だが、本誌の読者にとって馴染みのあるであろうことばのなかにその使われ方に違和感を感じるものが少なからずある。例えば“放射能”と“放射線”，“放射性物質”。いうまでもなく，“放射能”は原子核の壊変に伴って起こる放射線を放出する能力であり，“放射線”は高エネルギーの物質粒子や電磁波の流れで、ともにどちらかといえば抽象的なことばである。一方，“放射性物質”は放射能をもつ、あるいは放射線を放出する物質で、かなり具体的なことばである。このようにこれらのことばは本来、意味するところが大きく異なるはずだが、混同されて使われることがよくある。例えば“放射線漏れ”や“放射性物質漏れ”というべきところを“放射能漏れ”といい、“放射性物質”による汚染を“放射能汚染”と表現されることは少なくない。“放射能漏れ”や“放射能汚染”という言い方は“放射能”のことばの誤用だと思うが、よく聞かれる。ただ，“環境放射能”ということばは悩ましい。

“原子力”と“原子力発電（炉）”の関係は別の意味で気になる。上記の例と違って，“原子力”と“原子力発電（炉）”が混同、誤用されることは先ずない。気になるのは，“原子力”と聞くと“原子力発電（炉）”や“核兵器”を連想させるような世の中になっていないか、ということである。いうまでもなく“原子力”は核力に起因する原子核の持つエネルギーであり、それを利用したものが“原子力発電（炉）”であり“核兵器”であるので、その連想は間違いとはいえない。ただ，“原子力”ということばが“原子力発電炉”の事故を通して、いつのまにか負のイメージを負わされきているとすれば、大いに憂慮される。本来の、というのも変だが，“原子力”の背後には 20 世紀の、19 世紀までのそれとは隔絶した新しい科学概念の創造が広がっている。そこには知的好奇心をかき立てるものが満ちている。そうした知的好奇心、とくに偏見のない子供の知的好奇心を偏見による負のイメージで覆い隠してしまうことだけは避けるべきだと思う。

“アイソトープ”と“RI”のことばの関係も微妙である。“アイソトープ”を“RI”，つまり放射性アイソトープと同等のものとして使っていると思われる事例が少なくないように感じる。さしずめ大学の“アイソトープ総合センター”などは代表的例と言えよう。“アイソトープ”はいうまでもなく“同位体”で、放射性同位体の数は安定同位体の数に比べて桁違いに多い。とはいえ、やはり“アイソトープ”のことばに“放射性”の意味を込めるのはちょっと乱暴な気がする。ひょっとすると，“アイソトープ”と“同位体”は別の意味をこめているのかと勘ぐってしまう。J.J. Thomson によるネオンの重さの異なる安定“元素”発見から、F. Soddy による“isotope”の概念の確立に至る思考の流れは科学 philosophy の極みだと思うし、isotope を“同位体”と訳した飯盛里安の知性・感性には敬服させられる。そういうことを背景にもつことばだけに、よけい釈然としない。

ことばは時代とともに作られ、また、意味も変遷することはよく知られている。ただ、学術用語だけはその例外となるべきだと思うのだが、Isotope News 誌の読者諸氏はどう考えられるであろうか？